
大破壊前の科学者(タタラ)が荒野を往くようです。

二代目斬風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大破壊前の科学者が荒野を往くようです。
タタラ

【Nコード】

N2110Z

【作者名】

二代目斬風

【あらすじ】

ヒヤッハー！ MM2Rが明日発売だぜえ、と長らく物書きから離れていた駄作者が年甲斐無くハッスルしてしまったので投稿されてしまったネタと妄想の産物。

要するにメタルマックスな大破壊前の世界にて、NVA的な変態技術者達と共に技術チートしちゃった転生者が、大破壊後の荒野でアレしちゃう話な訳です。

【本作品には厨二成分が配合されています。過剰摂取にご注意ください】

【本作品は、メタルマックス世界が基盤となっておりますが、余計な要素が紛れ込んでいるため非常にカオスです】

【本作品の作者は基本的に遅筆のようです。生温く見守るのが正解かもしれません】

01話

脳髄を突き刺すかのように騒々しい警報音。点灯する赤色灯。施設のあちこちで重低音を響かせる機銃の音と、何か^{事実、爆発で}が爆発したかの^{あちこち}ような振動が絶え間なく伝わってくる。

凄惨な戦場と化した^{ブラド・イリーガル・テクニカ}非合法極秘研究施設の地下深く……表には出すには危険に過ぎる研究成果の数々が収められる第十三保管庫に隣接する管制室で、二十代半ば程である男が深刻そうな顔つきで^{キーボード}操作盤を叩き続けている。

果たして、男の前に浮かび上がっている複数の^{ホロ・モニター}投影型表示装置の中で刻一刻と変化する状況は、絶望的の一言に尽きるものだった。

「まずいな……ノア・ネットワークからの隔離隠蔽が裏目に出たか。まさか大破壊が起こる前に同じ人類に攻め込まれるとはな」

憂鬱そうに呟く白衣の男は、研究者というには随分と立派な体格をしていた。

身の丈190cmにも届こうかというほどの大男で、日がな一日^{テンプレート}頭脳労働に精を出しているであろう典型的な技術者らしくなく、筋肉が武僧のように隙無く鍛え上げられている。

艶の無い闇夜を思わせる黒色の短髪は、整髪する手間を惜しんだのか無造作に流されているのみで、頬から顎にかけての鋭角には無精髭。必要以上に威圧感と鋭さを感じさせる三白眼気味の碧眼は先程から忙しなく幾多もの画面を行き来し続けている。

薄らと褐色に日焼けした黄色の肌からすると東洋人であろうか？
いやしかし、その割には眉目や鼻梁に西洋人の名残を匂わせる彫
りの深さも窺える。

この何人にも見えそうな技術者らしからぬ男。名を真崎九朗とい
い、日系アメリカ人の父と日系ロシア人の母との間に生を受けたと
いう実にややこしい血脈を受け継ぐ日本人である。

「非常隔壁で時間は稼げるが、こりゃ詰んだかね。望みが完全に断
たれた訳ではないが……せめて保管庫の黒歴史だけは処分しておく
か。いや、すまんね同志諸君」

ふう、と彼は片手で収まりの悪い髪の毛をかきまわしつつ嘆息。
どこか諦めたかのような顔つきで、黄色と黒で縁取りされた赤いス
イッチを押し込んだ。

鳴り続ける警報音とはまた違った警告音が管制室に響き渡り、通
電する事で透明化、更には物理ダメージの殆どを無効化するなどと
いうふざけた装甲窓シールド・ウィンドウの向こうに、静かな威圧感すら伴って聳え立っ
ていた最終隔壁がゆっくりと解放されていった。

「よし！ 出力正常。各部及び兵装異常無し。マイスター権限によ
る再起動シークエンス実行。電子頭脳セルフチェック、プロセス六

十番以降を省略。いざ、蘇れ！ アイアンシエ……もとい。パイオニアDX！」

これまでのシリ阿斯を正面から打ち砕かんと、どう見ても先。者の同輩にしか見えない全高2.5mの神話公司系機人兵が、両目の部分にあるカメラアイを禍々しく光らせて立ち上がる。

真崎九朗と、中国系アメリカ人の技術者であるマーフィー・張チャンが古い動画を見て悪乗りした結果誕生したもので、性能だけは凄まじかったがブラド・コーポレーションの商品としては外見的に失格の烙印を押された代物である。

兵装は、左腕部に電磁射出式パイルバンカー。右腕部に13mmガトリング。背中の武装担架ランドセルに二門の小型連装超電磁砲。股間に何故か立派極まりない近接回転衝角が搭載されている。

更に、たかだか2.5m程度の戦闘用ドロイドになど明らかに不相応であろう極限までダウンサイジングされた常温核融合炉という気が狂ったとは思えないような代物を搭載し、転送装置を魔改造することで実現された試製転送式給弾装置が組み込まれ、しまいに何をどうしたのか破損程度のダメージを即時修復してしまう物質還元機構なるトンデモ機能の追加など、既存の物理学的常識を事象地平の彼方まで投げ捨てんばかりの超技術が山ほど積み込まれているのだ。

むしろ本体よりも、地底王国の変態どもがハッスルした事で生み出された副産物のほうがニューヨーク本社九朗と愉快的な仲間達の重役達に喜ばれたのは言うまでも無いだろう。

「オハヨウゴザイマス、ゴ主人。ドウゾ、ゴ命令ヲ……」

「ちよつと上の非常隔壁前まで行って、お客さん敵軍がこの区画へ侵入

するのを防いできてくれ。なおミッションの成否に関わらず一時間が過ぎたら自爆プロセスを実行しろ」

「任務リヨウカイ」

ギピーン！ と何故か効果音を外部に垂れ流しながらカメラアイを光らせた中華壱号は、キモさ全開これはひどいの軽快な動作を見せつけながら走り去っていく。

文句の一つも言わずに任務を開始したソレが視界から消え去った頃、九朗は「さらば。開発六課の黒歴史よ……」と小さく呟くのであった。

「さて……アレが時間稼ぎをしている間に準備でも済ませますか」

同志達は無事に脱出できただろうか、もはや完全に制圧されてしまったであろう上階層を思いつつ、九朗は保管庫の中を見回した。最大の黒歴史《危険物》は、既に処分捨て駒にしたした。流石のアレも主力戦車Tや機動兵器ウオーカーならともかく、歩兵隊の機動甲冑相手アーマーギアに不覚を取ったりはすまい。

「それにしても幾ら秘匿施設といっても、研究区画に転送装置が無

いとか……いや、確かに技術漏洩やブツの持ち出しとか考えたら無理なのは分かるが、こうなると悪夢だなあ」

こいつあ年貢の納め時かねえ、と獯猛に笑いながら、室内の中央を陣取っている奇抜な装置の電源を投入する。

ヴン、と低い唸りを上げ始めた装置は、翡翠の輝きを放ちながら粛々と稼働手続きを進めていた。

「……おおう、何気に生体実験を自分の身でする訳か」

どこか可笑しそうに肩を竦めてから、装置と電腦を直接結線。拡張領域に密かに保存されていた制御用OSが凄まじい勢いで装置本体——タキオン・テレポーターにインストールされていく。

「初期設定完了。一応、試すか？」

言うや否や、懐から取り出した一本のシガリ口を装置に放り込む九朗。

果たして装置はエラーメッセージを返す事も無く、主人の手を離れたシガリ口を何処かへと消し去った。

「いいねえ……何年後に跳ぶか、それとも違う時間軸に渡るかは分からないが、生きる目が出てきたかな？」

ニヤリと鯨が嗤^{わら}うかのようなスマイルを見せ、九朗は室内の緊急用端末から、管理者権限を使い隔壁を閉鎖。

白衣と服を脱ぎ捨て、素早くインナースーツに着替えると、危険すぎる素材で造ってしまったが故に、お上に報告される事すらなくお蔵入り^{永久封印}となった機動甲冑メタトロン^{アーマーギア}を正気度^{SAN値}を削る覚悟で装着する。

次に、幾つかの物騒極まりない武器や道具を格納空間（ベクター・トップ）に仕舞い込むと、再び取り出したシガリ口^{メタトロン}に今度こそ火を着けて一服した。

「こいつを使えば強行突破は容易い。だが、こいつの情報が軍なりノアなりの手に渡ろうものなら、人類どころか地球が滅びかねんか……我ながら何て物を作ってしまったんだ！ タキオン・テレポーターで生体転送できるかも未知数だというのに他に逃げ道が無いとか勘弁してくれ！ むう……こうなるなら三課の誘いに乗って浪漫の粹を凝らしたアルファシリーズ開発でもするんだったアアア！」

おもむろにハイテンションになり叫び始める九朗。早くも危険物の汚染を受けかけているようだったが、はたと正気に返ると頭痛を堪えるかのように呻きながらタキオン・テレポーターの光の中に飛び込むのであった。

その後、太平洋の無人島に存在していたこの施設は、想像を絶する大爆発によって地上から消滅したという。

生き残った兵士の中には、「先。者キモい。先。者怖い」とトラウマを植えつけられたものや、「光が、光が押し寄せて……」など

と精神崩壊してしまったものが続出したらしい。

そして、真崎九朗は――

（続く？）

01話（後書き）

この後の展開は……わかるな？

以降は、MM2Rが手に入ってから書きます（笑）

02話（前書き）

メタルサーガの舞台となった地域に飛ばそうかと思ったが結局こうなった（笑）

* /
 / * <<地図情報マップ・データの再取得を推奨します（重要度A） * /
 / * >！<無線通信網ホットスポットからの不正侵入を遮断しました（NEW）
 * /
 / * <<ネットワーク名：NoA からのアクセスを検出しま
 した * /
 / * パスワード
 T 通常認証 * * * * * * * * * * * * * /
 バイオ・メトリクス
 / * T 生体認証 success * /
 アストラル・メトリクス
 / * 「幽紋認証 failure * /
 アストラル・メトリクス
 / * 「RE：幽紋認証 failure * /
 アストラル・メトリクス
 / * 「RE：幽紋認証 failure * /
 / * <<Caution！ 不正なアクセス↓ネットワーク名：
 NoA * /
 / * <<ネットワーク名：NoA を遮断しました * /
 / * <<ネットワーク名：NoA を悪質なユーザーに登録し
 ました * /
 / * <<Caution！ 1sec に規定数を超えるアク
 セスが集中しました * /
 / * <<自動更新及び外部リクエストへの応答を中断します
 * /
 / * <<再開には システム管理者権限 によるロックの解除
 が必要です * /
 / * T boot twcp | GPxv22 . ctp * /
 / * 「boot chcp | GHacf w . ctp * /
 / * <<【ゴーストプロテクト】起動 * /
 / * <<【ゴーストハント】起動 * /
 / * それでは良い一日を！ * /



「嫌味が、おい……」

意識を取り戻すと同時に、脳裏に表示される古臭い文字列管制AⅠからの報告に九朗は思わず顔をしか顰めた。

タキオン・テレポーターなどという、（限定的とはいえ）時空間を越えて物質を転送する高次元存在も吃驚な代物に、機動甲冑を身に纏っていたという幸運があつたにしても、生身で……しかも五体満足で現世へ帰ってこれたのは僥倖。

だが、軽く見積もっても五十年の時間跳躍など、やはり凹む要素が満載だった。
電波時刻が正確なら

同系統の科学技術で発展した延長線上の世界であることは確信している。

何よりも、さっそくノアからの干渉があつたのだから、これは間違いないだろう。

問題は、今いる世界が自分の生きていた時間軸から直接派生した未来なのか、それとも時間軸を同じくしながら分岐した可能性未来なのか……はたまた、偶さか似た要素で構築されている並行世界なのか。

まあ、最後はなかりう。無いといいなあ、などと思考を彷徨さまよわせながら危険物を待機状態に移行させ、何処からともなく取り出した魔改造白衣をインナースーツの上に羽織る。
メタトロン 量子化モード 防弾・防刃

肉体にぴったりとフィットするインナースーツの上に白衣……彼は気付いていないのかもしれないが、限りなく変態染みたスメルが漂ってくる。

もう少し方向性がアレな方向に遷移せんいしようものなら、彼はMM世

界の西博士^{キ。ガイ}として名を馳せてしまう事になるだろう。

「時刻設定は更新するか…… 太陽を見る限り正確だろう。 自動更新…… といってもGPS情報は、大破壊で意味を成さないだろうし力ツト。それにしてもドいきなり侵入^{タッピング}とはね…… よかった。幽紋^{アストラル・メトリクス}認証を開発しておいて本当によかった」

何にしても準備は大切なものだなあ、と苦笑。そして改めて荒野と砂礫が広がる光景を眺めると、ふと疑問を覚えた。

「ん？ タキオン・テレポーターが無い…… だと？ 馬鹿な。必ず受信側の装置に出る筈なんだが……」

そう、あくまで転送は、同じシステムを積んだ装置間でのみ行われる。通常の転送装置^{トランスポーター}でも稀に転送事故を起こす事があったが、それでも別の装置の子機へと移送ミスが起こるだけで、普通は何も無いような場所に放り出されたりはしない。

奇妙な胸騒ぎを感じながらも、正しい解答を導き出す事など不可能な事であるため、それを一時棚上げする。それよりも今するべきは、休める場所と水や食料の確保…… なのだが――

「何だあ？」

怪訝そうに目を細める九朗。遠くへ視点を合わせようとする彼の

(……荒野と砂地。テッドブローラーとグラップラー達。輸送バス……まさか、“今”始まるのか？という事は、向かう先はマド？)

暫時、原作という単語が脳裏に浮かび上がるが、九朗はそれを即座に頭から消し去った。

既に三十年近くをこの世界で生きてきたのだ。ゲームとリアルを混同するような現実逃避じみた迷いは消え去っている。そう、とつくのとうにだ。

そもそも彼とて人の事を言えた義理じゃない。
ブラド・イリーガル・テクニカ
非合法極秘研究施設に所属していたという時点で、綺麗ごとなんて口に出す事すら憚られる。

「さて、どうするかな……」

ひょう、と口笛のような音を響かせ、一陣の風が砂と枯れ草を巻き上げる。

吹き荒ぶ風に白衣の裾をはためかせながら、真崎九朗は遠く、視界に入らぬマドの方角に目を向け続けていた。

(続く?)

02 話（後書き）

さて、MM2Rでもプレイするかな…

03話（前書き）

そろそろ硬い文体に疲れてきた。

・原作主人公のターン

03話

時は二十一世紀、それほど遠くない未来。

スーパーコンピュータ、ノアの引き起こした<大破壊>によって、人類の文明は崩壊した。

不毛の荒野と化した地上には、ノアに生み出された不気味なモンスターたちが続々と出現し、既に人類の大半が死に絶えた今も「人類絶滅プログラム」を実行し続けている。

崩壊の時より数十年。

わずかに生き残った人々は、廃墟に身を寄せ合い、かつての文明の遺産を食い潰しながら絶望的なサバイバルを続けていた……

「けっ！　どいつもこいつもシケたツラしやがって！」

青白い顔色よりもなお蒼く己の髪を染め上げている男が、甲高い声で悪態をつく。

針金のように細長い体躯の不健康そうな男であった。

顔つきも、男の歪んだ性格を反映するかのような凶相で、粗暴な

振る舞いと相まって幼子が決して懐かないタイプのソレである。

「別に死ぬと決まったわけじゃあねえだろうが！ 賞金の使いみち
考えるとかよ……ちったあ楽しくやれねえもんかね、ええ！」

閑散としたマドの酒場にわざわざ刻み付けるかのように荒々しく
足音を立てながら、彼は何事も無かったかのように瞑目しつつグラ
スを磨き続けている壮年の男性がいるカウンター席へと腰を下ろす。

「おい！ 酒だ、酒！」

あんな連中など知った事かとはかりに、男は壮年の男性から酒の
入ったグラスを受け取るとテーブル席に座る二人の男に向かって「
チッ」と舌打ちを残してグラスを一息に呷った。
酒場のマスター ぶつとびハイ

彼の名は《暴走バギー》のガルシア。見た目通りの小悪党ではあ
ったが、個人所有の車を持ち、幾らかの賞金首を狩っている少しは
名の知れたハンターだ。
戦闘用バギー チェンピラ

そんなガルシアの様子に冷たい視線を送りつつ、テーブルを挟み
金髪碧眼の優男といった風貌のハンターと鋼のように鍛え上げられ
た肉体を持つ長い黒髪のソルジャーが獲物の手入れをしながら穏や
かに言葉を交わしていた。
と言つ名のドラムカン 武器

「用心棒は四人集めたと聞いた……一人足りないようだが？」

赤染めのバンダナと特徴的な民族衣装を身に纏った巖いわおのような顔つきをしたソルジャーが手斧の具合を確かめつつ聞く。

携帯用の砥石で研ぎ澄まされた氏族のトマホークは、彼の鋼のよ
うに鍛え上げられた腕と比べると、どうにも頼りなく感じるほどだ
が、彼はこの魂の武器こそが最後の砦だと確信している。

彼の名は《鉄の男》アパッチ。9mmパラベラムやグラップラー
どもの5.56mm程度なら、軽く生身で耐えられるという”鉄”
の二つ名に恥じないタフガイである。

「もう来るはずだ。凄腕のソルジャーがな……」

アパッチの問いに答えたハンターは、《隼》のフェイ。

ハンターだが、ガルシアとは違い、個人所有の車を持っていない。
しかし、そんな彼が《隼》などという二つ名ハンドルを与えられているの
には、勿論理由がある。

彼は、ハンターでありながら生身による戦闘のほうが得意なのだ。
近接では二丁の拳銃で踊るように戦い、狙撃では1200m先の遠
距離から次々とグラップラーの脳天に風穴を開ける。

そんな異端のハンターたる彼は、自らが口にした飛び切りの凄腕ホットドガー
の横顔を思い出して、僅かに頬を緩める。が、次にカウンターでく
だを巻いている酒飲みチンピラに眼を向けると、今度は凍りつきそうなほど
に透明な冷笑を浮かべる。

「酒ばかり飲んでる賞金目当てのカスとは一味違うヤツだ」
「んだとオ！　こらア！」

瞬間、カウンターのガルシアが沸騰し、丸椅子を蹴倒しながら立ち上がる。

一触即発といった空気が流れ……それを打ち払うかのように、入口の扉が大きく開かれる。

そこには女神と見紛^{みまが}わんばかりの、硬質な美貌を持った女が立っていた。

鋭い眼差しと、凜とした雰囲気^{みまが}を身に纏う血のように紅い髪をした女ソルジャーだ。

「マリア！ 来てくれたか！」

今までの空気を見捨てて歓迎の言葉をかけるフェイに、白けたような視線を向けるガルシア。その両者を気にも留めずに、美しき女ソルジャー……マリアは自らが連れてきた少女へと声をかけたのであった。

黄金を溶かし込んだかのような金髪と、冬の湖水のように……或いは氷河のように神秘的な静謐さすら感じさせる色合い^{アイスブルー}の瞳。

160cmほどの細身で小柄な姿は、貧相にも見えるが、そう見えた者は今一度、目を皿のようにして少女を見ると良い。

こと戦い、生き延びる事に関しては厳格かつ過酷な育ての親スバルタンによって施された英才教育により、うら若き少女でしかない少女の身体は、引き絞られた弓のような緊張感すら感じさせる猫科スレンダーなの獣の如き強さと美しさを秘め、どこか悪餓鬼のような不適な表情には、将来を期待させる美の片鱗と生命力が溢れている。

「レナ。よろしく」

たった六文字で挨拶を済ませる少女レナに、ガルシアは性質の悪いジヨークを見せ付けられたかのように冗談じゃねえぞと呟いた。

いかにもな小娘ヒョッコを引き連れた保護者女が凄腕の戦力？ バカバカしい。

こいつは傑作だ、とガルシアが腹を抱えて笑っていると、そこに近づいてきたマリアが強烈な一発拳をぶちかました。

「そつえば、まだ挨拶してなかったからね。これがアタシ流の挨拶だよ！」

「てっ……てめえッ！」

細身とは言え、成人男性を水平に五メートルも吹き飛ばす一撃を食らっていないながらも、何気に元気なガルシアは、屈辱に顔を歪めながらゆらりと立ち上がる。

この女……思い知らせてやる！ と拳を握った瞬間に、遊びの時間が終わった事を知らせる叫び声上がる。

「来た来た来たーッ！ 奴らが、グラップラーが来たぞおお
！」

町中に響けとばかりに叫びながら、青年がマドの町を駆け抜けていく。

フェイは愛用の双銃と軍用機関銃を手に闘志を燃やし、アパッチはマシンガンや手斧を持ち、切り札のグレネードランチャーを背負うと静かに椅子から立ち上がり、表へと足を向ける。

「おう、女ソルジャーさんよ……後ろから撃たれねえように気をつけてな！」

ガルシアだけがニイ、と気味の悪い笑みを浮かべて罵声を残しつつ外へと出て行ったが、マリアは当然のようにそれを無視していた。

マドの町に集められた用心棒達の戦いが幕を開く……

「…………あれ？ 私、空気？」

ちなみに、黄金^{レナ}の少女は淋^{さび}しそうに酒場を出た。

（続く？）

03話（後書き）

原作通りの展開か、それともブレイクか……それが問題だw

04話（前書き）

- ・用心棒無双！
- ・それは死亡フラグだよ！

04話

「人間狩りだあああ！」

「グラップラーが来たぞーっ！」

「ひーっ！ 神様あ！」

口々に悲鳴を出しながら、マドの町の住人達が町外れにあるマンホールへと飛び込んでいく。何故にマンホールなのかというと、そこが緊急時の集合場所になっているからだ。

「ハッハア！ カモが鉄砲しょってやってきやがったな！ まとめて轢き殺してやるぜっ！」

先程の鬱憤うつぶんの全てをグラップラーどもにぶつけてやるとばかりに氣勢を上げて、自らの愛車ハギーに乗り込むガルシア。

マリアは、そんな混沌とした町の様子やガルシアを尻目に、自らの連れであり、喪った親友から預かった大切な娘であるレナに視線を合わせる。

「レナ！ ヤバくなったら、おまえだけでも逃げるんだよ！ それが生き残るコツだ。わかったね！」

大きな戦いの前には必ずやっている確認の儀式。レナもこくりと

頷くが、彼女がマリアを見捨てて一人で逃げる事は決していないだろう。

そんな娘^{レナ}の内心を見透かすかのようにマリアは、改めて「わかったね？」と念押ししてから、戦闘前の触れれば切れるかのような鋭気を放ちだす。

「マリア！ 賞金が手に入ったら……その子と、オレと、三人で一緒に暮らさないか？」

目だけは土煙を上げながら近づいてくる集団に合わせたまま、フエイはマリアに声をかけた。こんな時に、この男は何を言っているのかと内心苦笑を浮かべながらも、マリアはアパッチの「……来るぞ」という抑えられた低音に重なるように「生きてたらね」と短く返した。

しゅるしゅると風を切りながら飛来してきた無数の砲弾が、マドの町に破壊の雨を降らす。重力に後押しされ、威力を増した砲弾たちは町の随所に突き立つと同時にその身に秘めた力を解放し、あちらこちらに小さからぬ爪痕^{クレーター}を刻んでゆく……

町で最も大きかったモニュメントである植物プラントの半球状をした屋根が一瞬で粉々になり、幾つかのささやかな暮らしが営まれていたであろう小さな廃墟が、今度こそその歴史に終焉をもたらさ

れ、ただの瓦礫として散らばった。

「ヒヤッハー！ 狩りの時間だアア！」

「て、抵抗しても、む、無駄なんだなっ！」

「燃料や食料もイタダキだあ！」

「もちろん金もな。いひひひっ！」

そして、破壊された防柵から町中に数台のクルマ^{LAV}が突っ込んでくる。

蹂躪^{じゅうりゃん}への期待に醜く顔を歪ませ、バイアス・グラッブラーの人狩り部隊が我が物顔でマドの町へと降り立った。

「殺せ殺せーっ！」

「ヒヤアアア！^{レベル？} グラッ^{ボディアーマー}プルスーツに豆鉄砲なんざ通用するかアア

ア

「ハッ！ ノータリンめ。この距離で7mm機銃が防げるわけねーだろうがッッ！」

「……ゲスどもが！ お前らにはコイツ^{5.56mm}ですら贅沢つてもんだぜ！」

奇声を上げ、手にした銃を乱射ながら突撃してくるグラッブラー。

遮蔽すら無視して鉄火の前に飛び込んでくるのは狂気の沙汰とは思えない所業だ。

そんな獲物達カモに対し、外見や言動の割に冷静な目でガルシアが吼える。彼の言ったように、いかにグラップラーどもが大破壊前の技術で製造されたボディーアーマーを身に着けていたとしても近距離からの副砲を無傷で耐え切るなど無理な事だ。

所詮はアパッチのように鋼鉄チャクラのタフガイですらない雑魚ども……機銃弾の衝撃で防具の下にある脆弱な肉と骨が打ち砕かれ、瞬く間に絶命する。

そこに、防衛戦のためか常に愛用している二挺拳銃ではなく、多60発マガジン AK-107 カブトワリ 必殺の矢 弾装のアサルトライフルを手にしたフエイの魔弾が無慈悲に、そして正確に生き残った者達に永遠の休暇を届けていった。

「うげえっ！ な、何だコイツら……っ、強ええええ！」

「あべしっ！」

「たわばっ！？」

無論、ガルシアやフエイだけでなく、視点を変えてみればアパッチとマリアも獅子奮迅どころか、無双の活躍をしていた。

下っ端グラップラーのキャリコム9509mmパラベラムごとき避ける必要すらない、とばかりに片手で急所だけを庇いながら、逆手のマシンガンで冷静に装甲の無い顔を弾けた柘榴さくろへと変えていく。

そして、マリアはマリアでアマゾネス不死身の女ソルジャーの異名に相応しく、冷徹で容赦無用の殺戮を振りまいていた。

撃てば確実に相手のどこかに風穴を開け、敵の攻撃はまるで蜃気楼のようなステップで掠らせすらない。見る間にグラップラー達はその数をすり減らしていった……

「……こりゃ俺のお節介なんぞいらんかな」

マドに程近い場所にある丘陵地にて、白衣に仕込まれた熱光学迷^{ステル}彩機能で身を隠し、悠然と戦況を眺めていた真崎九朗は、顔を劇画調に変えながら呟いた。

無理も無い。眼下では、明らかな戦力差である筈のグラップラーたちが、たった四人＋αの用心棒に、あわや全滅というような領域まで被害を受けているのだから。

九朗とて、幼少の頃から洪邦富^{ハン・バンフー}という拳法と気功の達人に師事^{生粋のチャクラ}しており、研究職^{タクラ}という事で錬功の時間が半減したのを差し引いたとしても十分な戦闘能力は維持していると自負している。

が、こと戦闘経験という部分では眼下の四人に及ぶべくも無い。もし、彼らの二人にでも囲まれたら、よい所までは食いつけそうだが、最後はアツサリと敗れるだろう。

まあ、流星^{タイマン}に一对一で負ける気は無かったが。

「お、どうやらテッド様が動く気になったようだな。問題はテッド様がどの程度の化け物かによるが……ふむ、念のため距離を詰めておくか。狙撃手^{カフトワリ}でもあるまいに……デカブツとは言え、動き回る対象を精密狙撃するのは手に余る」

ちなみに、彼が今保有している武装で精密狙撃ができるものなど、
そもそもからして無いのだが。

この距離だと最小火力でも、連中が戦っている戦域ごと灰にして
しまっただろうし、最大火力に至っては、マドの町そのものを消し飛
ばしてしまっただろう。

どうしても言うのなら、精神汚染兵器の固定武装をぶっ放すと
いう手があるが、アーマーギアとして試作されたがゆえ、エネルギー
源を外部からの転送供給で補っていたのが災いし、現在はエネル
ギーの余裕が無い状態だ。無論、この大破壊から五十余年の歳月が
流れた世界に、極めて高度な整備技術が必要となる転送式電力供給
網が生き残っているとは思えないし、当然ながら再供給の目処が立
つはずもない。

何より、現時点ですら空間格納でエネルギーが目減りし続けている
のだ。いかに待機モードで節電したとしても早晚、電力切れでア
ーマーギアは転送蒸着すら不可能となった重だけの鎧と化し、格
納されていた諸々の物品は圧縮を解かれて辺りに投げ出されるだろ
う。

いわんや、今、メタトロンによる狙撃を敢行するという事は、行
き着く結果が早まるという事である。

危険物はいつそ使用できないように解体するなり埋めるなりした
らいいだろう。しかし、せっかく過去から持ち込んだ便利な道具や
貴重極まりない資料の数々を、みすみす失わせるという選択を九朗
は選べそうに無かった。

故に九朗は、敢えて危険を選びマドへと走り出す。

生身の人間とは思えない速度で。しかし、熱光学迷彩は持続させ

たまま。

この男……危険だと思ったら、そのまま消える心算^{つもり}に違いない。

（続く？）

04話（後書き）

- ・汚いなさすがクロウきたない
- ・レナちゃんは今日も空気でした（涙）

【作者の妄想】

クロウ（タタラ　チャクラ　ハイランダー●）　転生者のな
意味で。

- ・肉体派科学者？　技術チートのくせに武力まで持つ節操無し。

ガルシア（カブキ　カゼ　レッガー●）

- ・ラッキーハンター。しかし本質的にはやっぱりチンピラ。

フェイ（カゼ　カブトワリ●カブトワリ●）

- ・レンタルタンクの愛好家。でもやってる事はゴルゴ（笑）

アパッチ（カブト　チャクラ●チャクラ●）

- ・この肉体で君達の攻撃は防ぐぞ！　必殺技はトマホークブーメラ
ン（爆）

マリア（カブト　カゲ●カブトワリ）

- ・レナの保護者。本作ではN I N J Aじみた戦闘能力の持ち主。

次回、暴れん坊將軍テッドさん！　をお楽しみに（え

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2110z/>

大破壊前の科学者(タタラ)が荒野を往くようです。

2011年12月10日11時47分発行